

想然著聞奇集

五

三四二





想山著阿弁集卷の五

目録

一 折石観音利益の事

一 蛇の執念小蛇と吐出の事

一 天物の連打まゝと鉄砲の妙と吹束の者

一 には蜂の酒英つぼ蜂の飯の事

附蜂記の事

一 馬の言云ぬる事

一 狸の人々化々相對死とうとうの事

一 磐石の事

一 蛇貝り観世音菩薩現く居る事

一 蝦蛭別蜈蚣と変じる事 英割蟹と化じる事

目録

一 線道玄猪と截る事

一 鯨鯨乃女も又臭と捕る事

一 猫俣老婆り化居る事

一 弟本於く化じる神社の事



柳谷観音利益の事

京都西山の月神の方より南に二里許の柳谷と云所

ありとのあり三願山揚谷寺海之家粟生光明寺光あり

畧縁起の勢より南山八重子十一代

平城天皇の御宇之因元年秋史法僧都兼創の地之

幸言ハ子目子眼親善菩薩脇士ハ將軍地彦昆河天皇

右中言ハ春日大明神の法也とのい或之化人の化より

主護賜ハ史法洛東に在り内夢中ハ化人の言と蒙りて

西山の柳谷又ハ感得より建立するありと云と

と傳ふも後弘仁年中弘法大師も此山よ入り十三傳の

石像と刻し漢舎り安置ありあり字今ハ志心

僧都も此山に入りて飲末淨去の修修ハ此地よあり

柳谷観音

五ノ一

石に多傳三味より後ハ其菩薩常に本蓮を

くもて淨去名付あり又

白河院 勅令に依り水鏡之七堂伽藍と建立しありて

莊親より一に其後地震兵亂あり破壊せりとも昔

の聖おハ高海より奇蹟多ありとあり昔長の願

室室志堂と云南入り堂七間四面の佛圖と建立し

ありありが所今ハ幸堂あり代

帝乃 勅額あり 淨信作法あり

東山院 靈元院の 勅令ハ信作も他の美より寺

量室是海と入り 勅令ハ新額あり 淨信作法あり

すませ 時幸言ハ前の唐屋外氣物淨算清そ

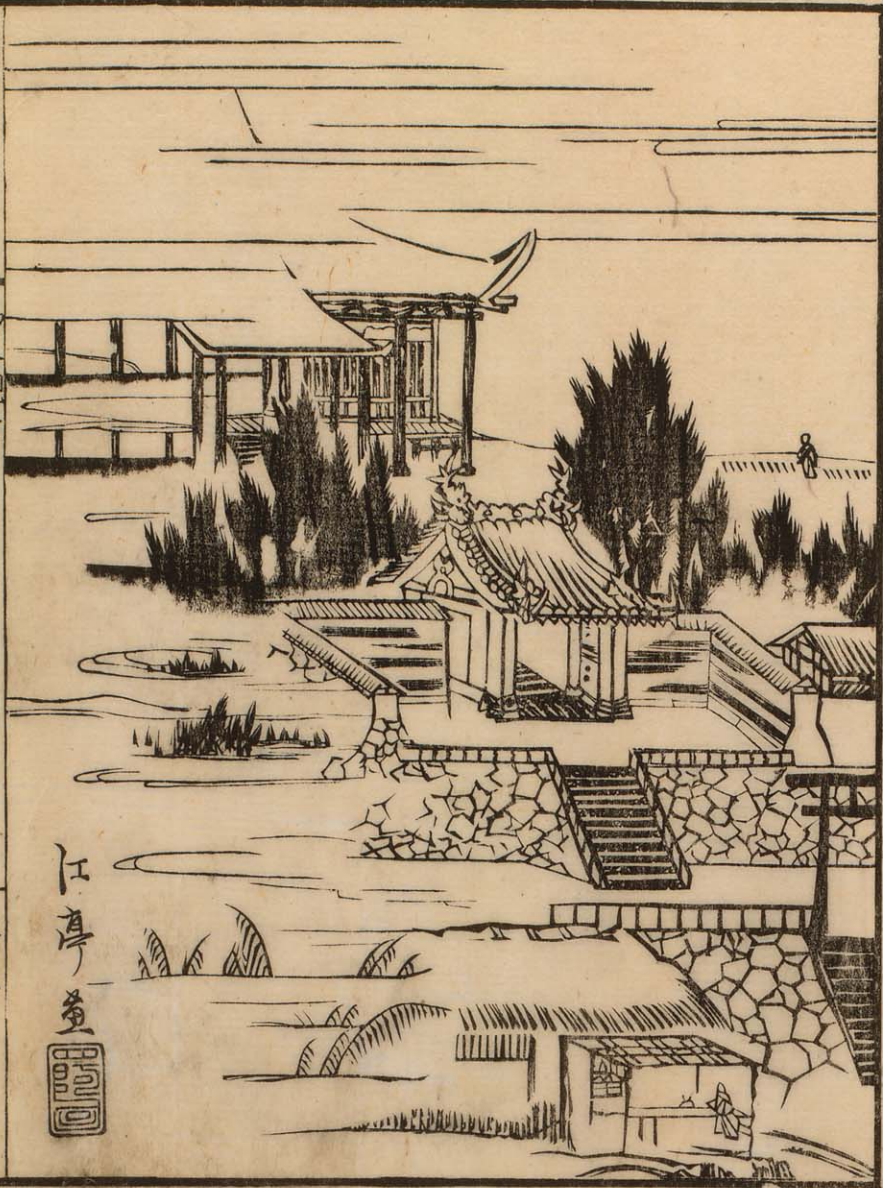
新宗賢門院も淨信作あり 淨信作の法子細あり



子親音の沙光の中へ西國二十之而の靈像と刻ま  
 め造れせさせあひく孫幸富乃別生を〜  
 危殆撲死撲雜とまぬるをさせあひく  
 天保九年戊辰の六月は寺へ齋僧せ〜  
 後より淋交山寺の道で堂内より二百六十人も薨り波  
 居く本音と云〜居り餘り作らる薨りくを色む  
 手敷と波行はは菩薩と初初とまは徳病と愈〜  
 中うち別々法眼病と愈〜  
 居り〜  
 悉く眼病の〜世を〜  
 靈験の事と同は法口と採〜  
 一切の眼病はは菩薩と信〜  
 新うはハ何〜  
 餘り廣大なる是經故なる況ま

右寺記の初〜  
 異名も難名西法又





江湾





利益と慕りくるも多きうと同一まゝ人の云私ハ風眼  
 うく修満者もとてせしうも終よあしもえぬ  
 振り成りゆは寺へ来りて即法堂へ董り始も  
 まご漸二七日よ及びりぬよをわ少けくえ袖中りと  
 云致感嘆擔り徹せしに垂よき傍り居る老人の  
 私も月癖と成きしにえぬ夜は成りゆは今日りて  
 僅十日董り居りて眼精を唱らうよ成強よまごき  
 事也と云たりては月を育人と成切ごき人の仰りつも  
 ころもとてと伺り又傍り人の之かふるまハハとも  
 法座の向の方よ居り比並尼もは間中を而え  
 中さきも水も繩傳ひゆく事ひひよまき一七有  
 りた成さきも一昨日より繩うに新振ようりゆ







四五〇人りもむの事なり〜の〜幸堂の〜も〜  
阿弥陀堂ホ〜色え使〜〜菴り居る事〜長も廣大  
之を乃妙智力ある故常〜諸人よ志せ〜〜後り見  
支文の事と主修記〜並り

地乃執念小地と土出と事

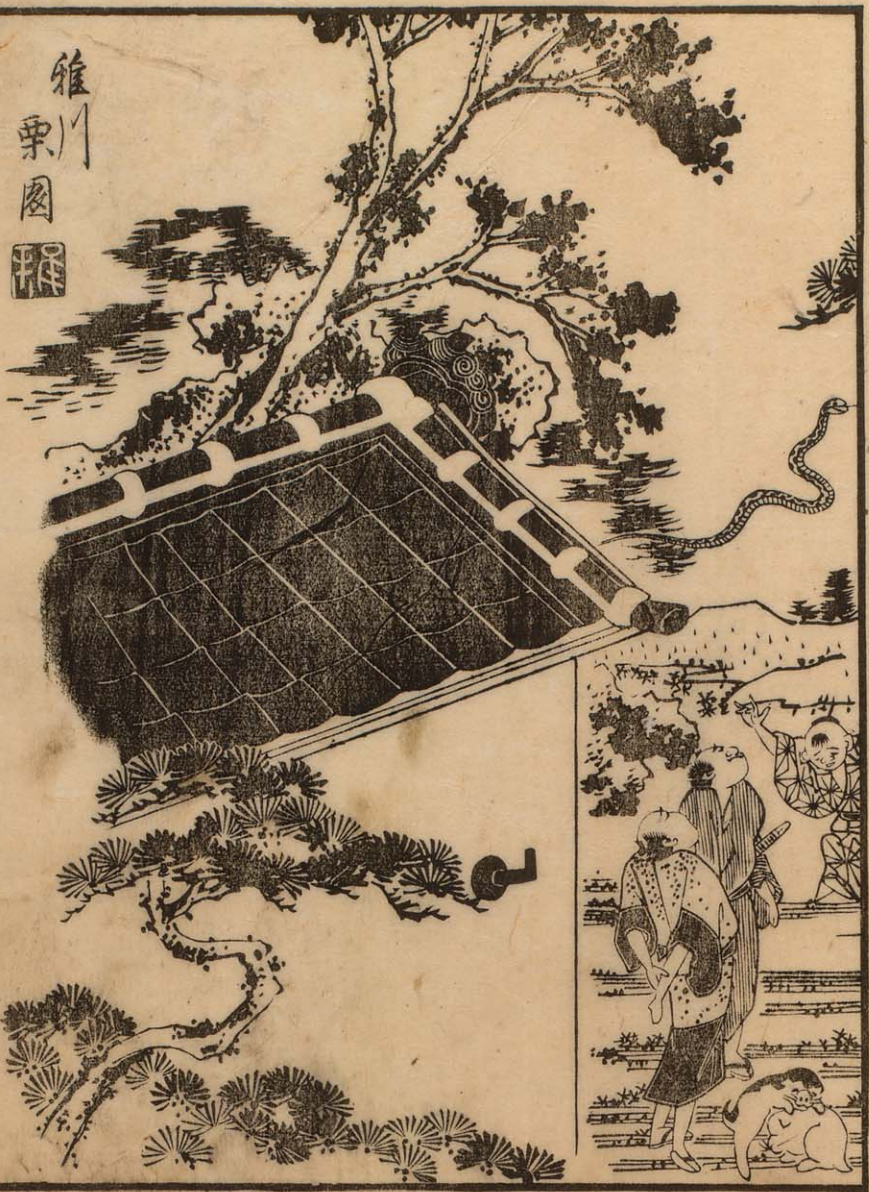
續別名松の内林〜地りり〜一方乃林山とこの  
林より宅よ去後りり〜去後乃哀の庇よま〜め菓と  
無〜出入りあるなり〜  
るい三回施福〜り〜回〜松り〜去後を或時をサ等  
只の餘もを〜蛇は去藏乃屋根よりか〜去藏のまど  
庇〜よを雀乃菓と目分思ひ入居〜こ〜この屋根の  
主菓と移〜ひ〜花無り〜ま〜も〜るい三回施福

居るま〜花後り〜び〜〜ま〜うりト〜と居る  
ども又面〜樹と傳いてえ乃去後乃屋根より来り  
初め乃〜の菓とめ〜居〜花付たるよ〜及〜も  
形〜ト〜居りり形の〜ま〜る事無松十日種よ及〜  
ども花思ひ止〜〜花付て去後乃事救十夜り  
〜も〜精を教〜身命と抛〜花付るゆゑ  
〜後ハ物行〜思ひい〜〜法身又見物乃  
〜も〜集〜目も雜〜終日うぐめ居〜り  
〜角〜乃花後りり形のよはり小地と吐無〜の  
小地ハ意の〜花付て去後乃事救十夜り〜ト〜  
居〜ま〜切よ死〜り相の〜小地ハ物行る〜目見居  
〜の〜菓乃方〜法身時乃内よ志〜二三人の大ひ



肥後成雀乃由子と存ふよ吾は出居りてり三葉い  
 ころく竹まき持来りて下へ落しと由子と吾は  
 少くも河を大母の邊までさしてりてりひ竹の若も  
 ぬ敷く捨てりてり事安永年中の事りてり  
 うの林も畑氏乃隠居竹某の若きとてり現よひ吾と  
 見居りてりてり廣野清助とてりへば世に色も  
 餘り奇なり事りてり自身よ見介事りてり孫を深く  
 ぬ色はゆきとてりや物りてり文政十二年の夏右  
 清助乃近隣に小夜川中天神下或方乃も上り陸を  
 右天神下の水道場とてり四尺餘り乃大蛇とてり人  
 殺りてりてり後少く焼火着りてり歳及も運りてり  
 たり肥後若痛よとてりてりてりてりてりてりてり



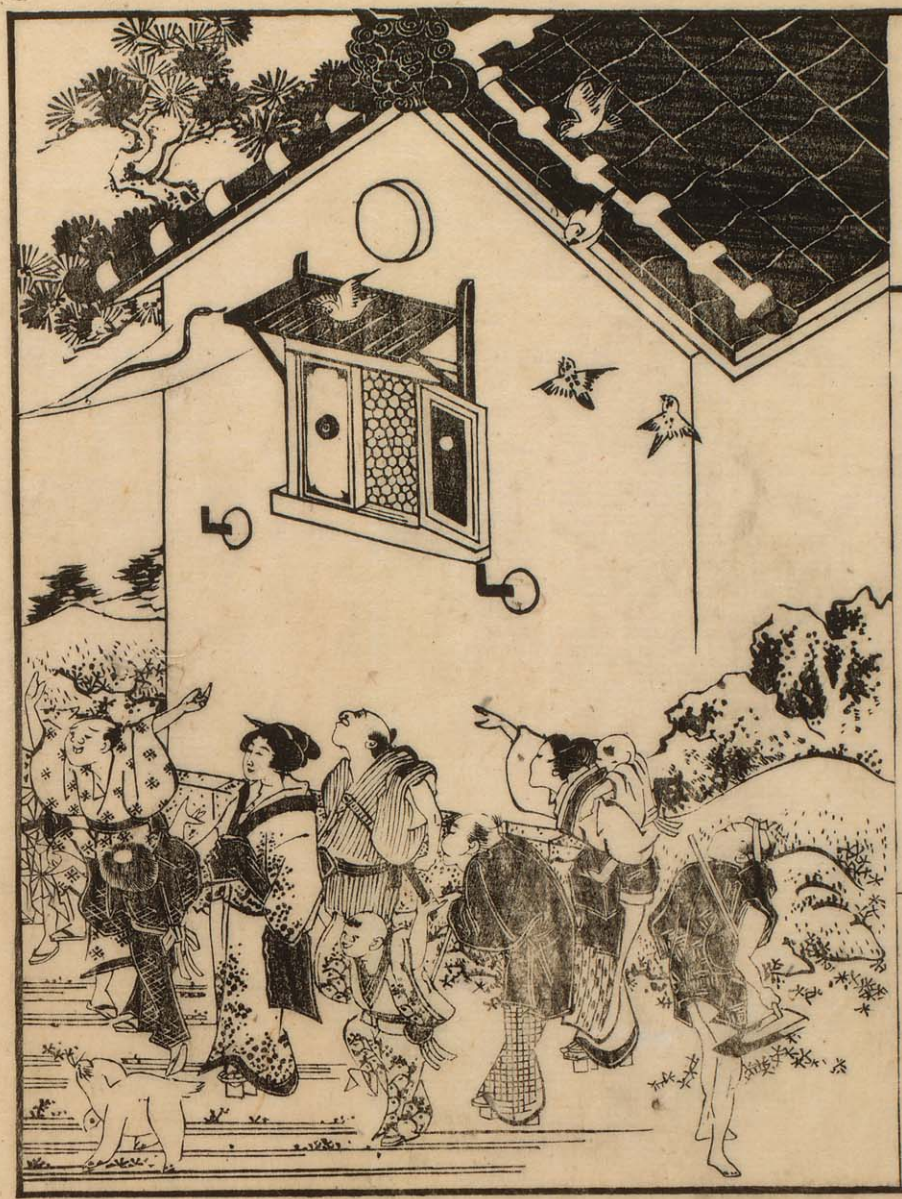


雅  
栗川  
圖



蛇ノ執念

五ノ七



蛇ノ執念

五ノ六



是る頃より及びく又かの焼火着うくこゑの傳せらる  
 時ははうり小蛇と吐出しうりさもがよ先刻より久そあ  
 たるまうする強氣乃陸尺も肝と流し思もぞおげ出  
 せにば小蛇の者と逃初うり傍り見物し居ふ  
 傍軍のものこや川せ色くハ必竹板の事ときかも  
 ちもぞと云さ由は流流し捨かの親地もし  
 殺し捨しと日が毒なるもの現よ見たる事こそ  
 是と以たるこもこ前漢別しる奇も能ふはりぞ  
 とある具り流物乃お居り之地を胎生するものうくと  
 卵卵生するその故腹中よ小蛇のまじり親念乃  
 流さるの故激し思ち形ちと成もの成は奇成事と  
 神仙乃樹のを刺と吐く体と授又他の人の体とりる



事も或之鉄拐仙人のてし自身の体と吹出も瀧も  
りりと安なるふ似たる事なりて鉄拐の甚安事とある  
也

我國名古屋の真廣寺の光僧は記と因てける  
るに京之茶の佛現寺の住持所載中の因ゆりこの  
證興寺の本願寺の法使僧よりて運向して法僧と  
ちり居りてまゝ其幸雲の裏の方ハ雲籠りて遠  
高きこまを根の及の回リ蒼景と無居り雛鳥の  
巢を想り居るとより地の間と見えしとや二三白  
鳥とよりぬ信居りて首とよりとまきても如何せ  
堂のてし事も叶ひてて遂に挿りて真徳り  
之より居りて後モ信僧を悟びて蛇を丈切と死より

地ノ執念

五ノ八

其時り見込を居り雛鳥も死し之れも心付もなる  
落たり是行改と云事更にしるに右の雀と前  
料理見るとに腹中よりつらとをやらし蛇殺居り故縁  
りも腹と裂見るとより雀も小蛇殺居り居ると  
現り見來りあり連支改年より右古屋の本願寺の  
徳而下るりてしとて安座しる事執りてし  
もさぬハ先回折る事とて又予は居りてしゆ  
記一海魚也

天狗り連折りて鉄炮の如と改來りて者の事

文化二年丙乃事改が養濃國郡と名大屋村と重五所と  
し者も年十四の時裏りて風呂に入居りて天狗もさ  
先自ら乃家の入口よりて三國社の松の本の梢へ入りて















驚く痛む狂りたるさゆ多く焼時ハ子も子も焼  
 ねまき事と我花の露んはよ合と来る屋く同は羽の  
 もくの脇の下の所は付来りく澤山たるのハ豆粒花つ  
 付来りもまきかの蝶蜂も時々花と吸よ出るとえ来  
 蜜蜂ハ捉正後そのみく多々群り居りものるをた  
 めくの吸りく花と乳とのハ葉と造くど葉と造るの  
 花ととくむく時々入替りくま夜とひむそ中よ  
 罵さ性乃遠ひたる遠き蜂十才中もく是と去俗細  
 子人く唱ふは蜂園身乃園と身らめく又換非遠使の  
 くと罷せらるるく完の口と身りく元蜂乃出入と換め  
 着花と持来りくく完よ入んくものるはバ替りの  
 悔息と責りく入事と評きむくまよ再と怠る老ハ遊よ





秋若





警教きやうきやう一々いっさ軍令ぐんせいを初はつは異いのちもも中ちゆうは大王たいわうと云いく  
 大おほき成なり峰みね一いつ王わう二にのち基もとと據よくくは而しかと居ゐるもと異ちがひ  
 の原はらハ必かならずの基もと乃すなはちち一いつのち高たか直ちよく一いつ君きみと  
 守まも護ごううももるるに似にたり王わう乃すなはちち子こを世よと終つひく王わうと成なりく  
 えより花はなととるとるる一いつ日いち群ぐん蜂はち花はなととるとるる王わうに供くを  
 玉たま二に欄らん一いつ足あしのちのちるるよよと産うむむ雌め雄おをのり  
 回かへりく道みち理りは於おくくハ奇き異い成なり幸さい之のと云いくも王わうも特とくく  
 控かへりくもも一いつ餘あまのち王わうのち番ばんのち雌め雄お居ゐるもと警きやう令せいをのり  
 産うむむや量りやう多たくくも群ぐん蜂はち是こゝに從したがひひ侍しやうもも事こと實じつは玉たま體たいを  
 向むかへく種しゆのち作さく法ぽう多たくく物もの一いつとと變かはりく委あづかりく事ことを  
 山さん海かいのち産うむむ後ご蜂はち蜜みつのち条じょうをのりく洋やうをのりくは蛇へびももそのちく  
 散ちり交まじりくるるも事こと一いつとと思おもひひくく鳥とりは回かへりく探たづねねた



廣と遊者ハ山と見むと金と擢む者人に見んと云  
 右流乃如く何分山中云氏乃元事故又福ハ心と當て  
 見極むる人うき色ハ行とも知難一後と多一  
 又ハホ蜂と云む是を蜜糖より作りて  
 少き糖ハ薄白黒の紋を  
 蜜乃如く蜂之幸奈徳目糖蜜  
 是も地中ハ完と坊々  
 完乃中又母乃糖の氣は  
 形ち傘の如く又作りてる蜜と  
 蜜蓋も重箱と手繫は梅の  
 その一回国苗木栽培より  
 佐別本曾舌の色なりと云



ハホ蜂

大さ  
は位

蜂の子  
大さ  
は位



蜂も焼殺せしるりに完と坊々々件乃菓と元菓  
 中よと亦乃向々柳畑の如く子と坊々蜜使と味と  
 けけ飯と焚く者より中ハ入る海と坊々是と  
 一ぼりしきし海客と坊々蜜使と坊々是と  
 飯の食する事々之風味ハ油多々香々香々  
 うまきものことハ油と名古色なりより多りける  
 そのハ蜜味悪者々々湯食ハ味々々も多々一平も  
 食法々々も佐別人や養濃人の飯び々食する種乃  
 風味の々々ハ海糖突り小瓶の味々々味ハ海淡  
 の人々飯々食人々ものよけ々々養濃乃固熟と也  
 うくも坊々々養甘々酒の者々々せもまじりて  
 飯々々々も坊々々も蜂飯々々々事も何りて







本草卷目より土蜂山谷穴居作房赤黒色最大螫人至死  
亦能釀蜜其子亦大白まゝに蜂之蜜と醗と云奉  
ひ去蜂は能似く居てもくを替く死にせんと云奉ハ  
向くとも別種をかり兼たり

蜂記云ハ蜂の數多群死く爲る奉之由そ折  
も奉く死く大に能り爲る時ハ小象箱も群を集りて  
重り居り合居る奉も又本草のちちち六回も  
十回も少のまゝなるハ半一面り成くこまり居面  
と同一而居く又二王も少く竹とて揚紙  
初との我主居り居る肉ハそり殺後奉るハ  
竹も會どさの動もせざりゆり居るもの我  
教方の蜂悉く一致く各自のちちち一奉り

二十四蜂

五ノ十六

我奉りく又一奉に能初も合軍令をせぬ敗よ  
一致く一黨と云々と蜂記云も是は比く奉  
むかの成りけく新蜂記もるもるぬ奉たりと  
云俗の吐より亡父の吐よりハ山中く蜂記も  
時と事道も二里もたり集りく住居る故是地  
蜂并奉く云もいぐあつと蜂無く一蜂會  
ぬり亡父ハ本曾養護るの深山へ折居りあり  
人あり

馬の言云ぬ奉

天保九年四月八日の奉りて東海道尾澤宿の馬  
平塚宿へおと付折居り馬并宿へ  
付誠よせせらも天威の方へ登りぬるは回もけい



坂を引く（引） 坂の松原より坂を引く 向より大坂若の権吉と  
 り者の持馬（持） 若と付く 抱の馬士幸来の坂行抱と智合  
 物来（物） 付替んとあらせよ 道中（道） 馬の若も重と故若沃の馬士  
 大坂より付来り 馬の若も重と故若沃の馬士  
 乃多松は八折南勢（八折） 止りて 外は安居る者も  
 未言へざる（未） 若り 彼権吉の馬人の色りよりの松  
 毎日の重行と背負（毎） 末の眞利がらるめん鹿の  
 云より彼方の馬士（云） 外は安居る者も  
 識り驚き忽ち其性（識） 若沖よ安え若人権吉  
 の馬士が馬と此道成をい松せと忽ち彼馬士も  
 引く（引） 夜逃電せ 我馬士の存も後と  
 此の

馬ノ言

馬士若の悪者（馬） 常の若の重行と掛か馬  
 二匹（二） 八十と二匹の付く 外は安居る者も  
 小の若故藤澤の馬士（小） 日方多と事と若と若  
 物来をせ（物） 二匹ゆりの貫目故の若と若  
 如い云ふるなり権吉の馬（如） 若の馬の若と若  
 金う（金） 米印と文と半貫目位の若と若  
 若と百貫目位も若（若） 若の鹿毛の若と若  
 物も若の貫目の若（物） 若の物と若の  
 若事（若） 若の若道よ若の利へ若人へ二匹分の  
 賃後と生（賃） 若の二匹分の賃を己の若と若  
 若の若の若の若（若） 故の若なり連馬方仲海  
 若の若の若の若（若） 若の若と若の若



ちりり〜之首京方の公方義熙とに別乃粟本形由り  
の里は陣と怒りも交り〜法橋嶋室らせのひ佐徳  
元年三月廿六日は薨るも其前乃夜十六回馬をり  
三重へたる馬の中より二回馬をうつるごとく草毛  
の馬忽ちよ人の如くもろ〜今ハ叶りぬぞや〜云り  
又陣の河原毛の馬声と合せ〜何〜うや〜と云  
あふも前より馬九共並居〜中間小者多〜居り  
く〜皆巻と笑よ正妻馬共のよの云く事急ひはじ  
ぬの毛〜う〜怒り覚え〜か次乃日將〜とあ  
義熙云薨るもい〜微り不思成の事〜物候子と  
り〜双後よ見え〜文面乃指子不燃成事〜ハ思ひ居  
あきども更ハ昔活り〜成るる〜新今目前よん受

馬ノ言

五ノ十八

もるハ縁後事故妻後記〜色ぬ平は成年上京せんと  
胃八百八に戸と後足〜翌九日は大坂宿と通り也  
〜ともは活と笑む〜翌十日の早朝予が荷物と  
付〜か馬士ハ小田原宿の子〜女〜云者〜は着の世は  
昨日の馬の世と笑〜故産實物行〜り〜大坂宿  
ま〜〜あり権者方〜行〜見てあり〜ハ早馬を  
匠運と法法下あり〜祈り居り〜中〜馬〜の〜云  
事ハ出来り〜も〜も高生〜悔り餘り水道をうる  
きい〜と〜も〜金〜と又道〜ぬ悪事〜の〜きい  
捨り〜故馬預親音振の馬は成替り〜と〜の〜と  
作ら〜我〜と流めり〜せら〜の〜存〜り〜と〜具よ  
活りあり〜ハ〜の権者の馬士〜年来回宿り





馬ノ言

居る右馬士の言葉とも初居る馬場と仰事  
 ともお作りと云うく其は佐成事之お彼云云あり  
 言葉と会入く再と尋るるは毎日重荷とシヨハ  
 末の真判がワルカベいと云うりと馬も別る故取の部  
 云うく云うるハ此の事之馬の云云一車外と云  
 かくて其友御道毎所の道と云う尋探るは枕木  
 云うく云う事ハ何事とも現り云云と云事  
 かくかく漸に成候今一門は是ハ平塚若かりし道  
 ありくまきの村と云有海道色ハ色ハありて東面  
 枕木屋活右馬と云者も高賣物と云た意ハ  
 成りが伴成五所と云者馬と好くは身馬と持も  
 亂荒うく云種ハ馬と責吐り人とも突然りて喧嘩と







言えたるよははさの相場死脚乃重荷と附く証也り  
しよりハ如く荷のくもくも腹のくもくもを若衆事と  
云ありとの事風り奥居りまより馬がその云鈴鹿  
乃愛がと云馬士噴出来く今にけ噴き諸國より飛入  
事之のくもも成年母乃乃幸ひ坂の下又ハ鈴鹿をそ  
馬士其よ母の探りに馬乃その云くると云事ハ水も  
り母馬がその云鈴鹿の愛でかま女席ののせくゆこ  
と母の云くもバ馬の云云事もまきくも云云故竹とり  
馬がけ扇ぐその中た見えまきくと云云故竹とり  
せくと母乃にかま女席ののせくゆこつた見  
えく事よと飛ひまきくと云云と云云地ゆきて  
母乃に一向のり兼隆と云くもくも熱許平洋孫活の

馬言

五ノ二一

類も十又八九は九面なる事多し又面をこ出り虚  
多クもバ此の如く書記の事をもと取捨多し其も怪  
成事乃と探りある一色之物に鈴鹿のくもも  
馬の云云事ハお遠くも振と思ひるまも九面なる之  
跡り多し  
又周界物活り武別社宗川の藤入君と云くも津  
けの故事乃の羽織と盗と著く物とまきるとりまき  
事乃の羽織なり何進若く物と馬が物云又図書よ  
に別りく或家(盗人)物と云く出んとまきかと  
馬進延くも其物もるも又速く事云事云何  
其世におつり事くも其物もるも又速く事云事云何  
其願目と償の事馬の活りくも其物もるも又速く事云事云何  
程のくも其物もるも又速く事云事云何



尾張の國豊田を丹戸向村東海道宮宿より百姓の娘ふふと

以女をく生け并指悪友後逆宮宿乃月築出一町

御道東の場 逆初志づきと麻屋うぐと旅籠屋は飯盛

女く射りく勸店芝敷船橋中村松原と異名さき迎色よ

てを誰あぬ者さきと海丸放流するものなりし

回而發結の抱の着は竹と云男もくまらんけ一匹

は男と悲ひ合しぐ或目今夜申半お對死無を

ふもろ乞ふは世男も其約束くく分まぬ相男はど

考へ妻成約束とらせしもの哉と一思ひうぐその夜

約束乃時刻もつる頃と八竹のものうと一思ひ酒をぐと

さめめさ歩行く夜も更々よ陸ひく約束せし事の

忘るがく一ひる女ゆも今福ささぞ侍使く店

裡化

五ノ三十一

庭り畏れも事よふかありまの約束乃場而一尋ね

控の上より知も南もせをやく思業と極めかの約束

場而高田村兼出町より秋葉の森へ行く見たり毎の

候とたもたうさきども更切もお重くゆり来りて毎の

まおと舞かよ九つ比まぐ八店さきども更より店さき

りく尋ねる象中之ま外迎色うき是尋ねまど毎の

りり不更よ志き驚るま不審り思ひたぐうせんさ

たうと夜は更切よ赤魚よりと相毎はき秋九時肉と

物く約束乃く高田村秋葉の森へ行く見たりよの

男も来り店く何と明くひくも又三丁先い流く

寮と云子葉乃古木敷くくさきも物さき

恐ら敷表をけ而一の男と之けく漸夜も消えんと

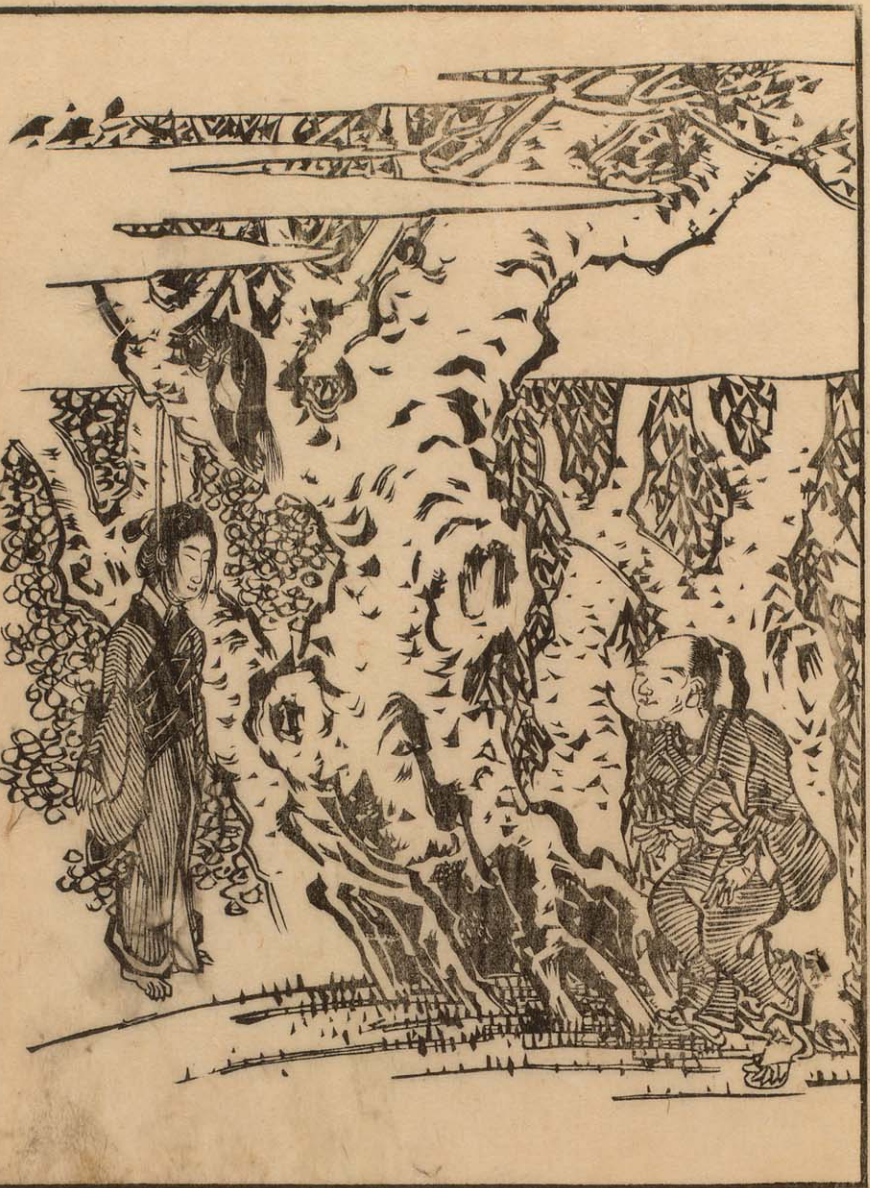


五郎 頃よ及びく道の端なる榎の本の六尺中より  
 五郎 六郎 有りたりける枝は腰帯よりよはるくお懸け  
 枝の末端より一人一皮の首を懸りて  
 死なへんやうかよ世行成事を男ハ  
 腹連たりより女ハ重ア  
 死せんともども死の色どもやせまぐりやくや  
 思ふ折ぐら早業も喰液り懸く隣村法美而村  
 の着色り懸く重粹と見く大よ警るも能く見るよ  
 女ハ徳の女もまども片端は縊死し居るハ福福乃  
 程なり人よりハ懸るゆゑ本の股を物とせし首を  
 本乃股へ懸き込まて死居り女ハ支如は助命か  
 へまぐり居るものへ又手事をとせし後懸たか





長  
 澤  
 於  
 史





るるの發法うしやひの男をとこも少まじらんあものくまりたか  
 是これハ予よが家僕けやく孫まご也や云者いふものハ井田村いであむらの連隣つれづれ本村ほんむらの  
 者ものあり一いがかの男女おんなも竹馬たけうまのりの友ともあゝ去さるも心中しんちゆう  
 一いつまご女よんなと狸たぬきとまじに本ほんは怒いかり居ゐる所ところも延ひ延ひ見み  
 正ただ見みてる事こととぞ是これハかの人ひとを化たふす狸たぬきのくまのたの  
 野の狸たぬきもくハまごとあまごり昔むかしのりは幾いくばくの也やは焼やか  
 あゝ折せて人と威おどすあまごのむりくハ威おどす教しへる事こと  
 向むかひまごは野の色いろのく大おほ大おほと揚あげ村むらのくく尖とがた  
 火ひ消け道みちをなご持もつと去さり見みると消け失しつるあごて  
 煙けのりさげらとさうと騒さわがせ又また例れいの面おもては涙なみだのき  
 たりと悔くの事ことなごくまご也や行い成なりものくあゝも  
 去さるもさうくは愛あいの後のちハ怪あやま事こと一い度どもさう皆みなけ







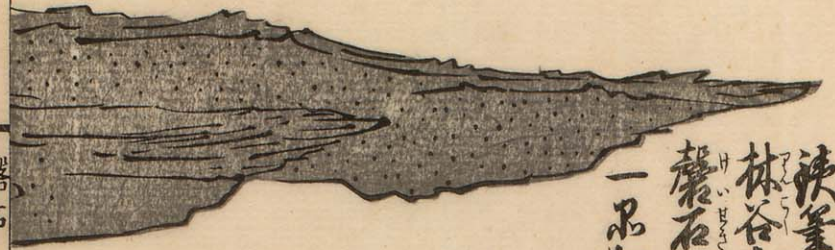




淡筆家細川  
 林谷奇石と好  
 磬石教品とを  
 一品と書字  
 う並

石質も大同  
 小異は  
 音も又煙く  
 うらぐらぐも  
 全鉄の音  
 うり

面

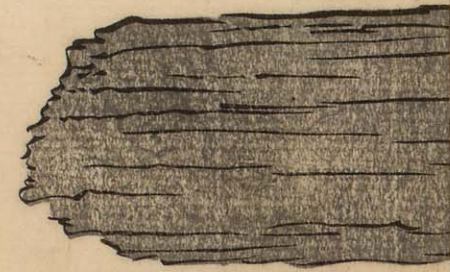


磬石

横



裏



五ノ二十七



平が友肉藤廣庭は石と一川不持なり居きり  
 う根成石と云ふを白目形ふ灰崩りあ  
 石肌荒く藤う〜〜〜新肌の色でも欠にハ  
 如行りともま密う〜〜磨けが幅々塗乃〜〜ぬり  
 お遠うい石片面乃端の取よ少〜〜欠底をい底の方と



